

## 終章

以上 10 章にわたって本学の現状について報告し、自己点検を行ってきた。本最終章では、報告を終えるにあたって、今回の自己点検によって明らかになったことをまとめておきたい。

2005 年 1 月 28 日中教審答申「我が国の高等教育の将来像」には、大学の機能別分類が次の形で示されている。

1. 世界的研究・教育拠点
2. 高度専門職業人養成
3. **幅広い職業人養成**
4. **総合的教養教育**
5. 特定の専門的分野（芸術、体育等）の教育・研究
6. **地域の生涯学習機会の拠点**
7. **社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流等）**

本学は、神戸という地域に根ざした、キリスト教の愛の精神を基盤とした女子大学であり、上記の 7 つから、本学の建学の精神と合致するのは、3、4、6、7（臨床心理士養成を目的とする大学院心理学専攻は 2 も）であると考え、大学全体の構成をそれに合うように整備してきた。

具体的には、次の 3 つの点を重点目標として設定してきている。

- **女子教育**（3、4 を現在の日本で生かすために）  
日本においては、社会に出て活躍する女性はまだまだ少なく、当面女子教育には積極的な意味があると考えられる。女子の大学進学率にも、ほとんどが女子である短大への進学率（数パーセント）がやがて 4 年制に移行していくことを考えると、まだ上昇の余地があるはずである。したがって、女子大の特性を生かしていくことを考え、「女だてらに」という偏見に屈せず、一人の人間としてのリーダーシップをもった卒業生を送り出したいと思う。さらに、単に「男を模倣する」のではない、女子大ならではの卒業生のあり方も志向する。
- **地域連携・地域貢献**（6、7 を地域に生かすために）  
灘区・神戸市・兵庫県、あるいは広く西日本などとの地域連携・地域貢献に力を入れる。その際、キリスト教センターを通じた地域連携は重要な基盤となる。神戸に基盤を置く大学の強みは、首都圏や大阪などと違って、物事を多面的に見る機会に恵まれるということである。同じ日本の中にも、ずっと中枢にばかりいたのでは見えないことがある。日本の中枢を外から見ることができなのが、神戸のような地域で生活することの強みである。本学を卒業して他の大都会で働くことになっても、物事を一步下がって客観的に見る視点を得たということは将来的に有益な作用をもたらすであろう。
- **国際性**（7 を世界に生かすために）

本学が基盤とするキリスト教の精神は、世界の多くの地域で中心的な宗教的基盤となっている。日本におけるキリスト教の浸透度は必ずしも高くないが、今日、キリスト教的な考え方は世界の多方面から情報として入ってきている。伝統的な日本の考え方にある利点のみならず、それ以外の多様な考え方にも触れ、日本と世界の他の国々に住む人間どうしに共通する普遍性に気づくことが、国際的な場はもちろん、日本国内の職場で働く場合にも有益に働くだろう。

序章および第1章で触れたように、本学は英語と裁縫の2科目を教える女学校として発足した。本学院は、英語を中心とした、教養主義の学校というイメージから出発したと考えてよいが、今日では、英語も、教養に留らず、社会人として生きていくための必須の道具として捉えられる。一方、「教養」と対比されがちな「実用」は、キリスト教精神を基盤とする大学としては、社会の役に立つということだと捉えたい。第8章で述べた社会連携・社会貢献に関連して、学生という身分の間に様々な形で社会から受けた恩恵を、卒業後に還元して行ってほしいと思う。

今日の大学では、いわゆる「リテラシー教育」の重要性がますます大きくなってきている。社会に出て必要とされるのは、個別の細分化された専門的な知識でなく、日本語を適切に用いることができ、論理的な判断ができ、自分の考えを有効に伝えることができる能力である。大学が学生に対して最も貢献できることは、そのような形で、卒業後に自律的に生きていける人間を社会に送り出すことである。

大学にとっての学生は、上記のような形で社会に送り出せるように責任をもって育て上げる対象である。大学は、学生が、入学時にはもっていなかったものを手に入れて卒業していく場でなくてはならない。そのための方策として、第5章で述べたように、アドミッション・ポリシーを明確にし、受け入れた学生に対して、第4章で詳述したような様々な形の試みをしてきた。これらは、いずれも、ここ数年の間に実現されたか実現されつつあるものであり、学生が勉強しやすい環境を提供するために、大学も急速に変わらざるを得ないという状況を感じる。また、第6章で述べたような学生支援の体制を整え、勉学に対する障害を軽減していくということも、ここ数年の社会的要請であり、大学としても自発的に取り組んでいかななくてはならない道であると考えられる。こうした方策を通じて、学生が単にコマ切りの知識を身につけるのではなく、与えられた知識を自分でまとめ上げ、自分で組み立て直し、自分の基本的な一部とし、そこから外に伝えていく力を身に付けてほしいと願っている。

上記のような学生を育てるための教職員は、大学という場においては裏方にすぎないかもしれないが、教職員自身が大学で働くということに対して、やりがいを感じて生き生きと仕事をしていない限り、学生にとっての大学が、楽しく学びがいのある場とならない。まず先に、教員が自分の教育、あるいは、研究面も含めた、自分の生き方に充実感を感じる必要があるし、学生の勉強および教員の仕事が快適な状態で行われるように環境を整備するという仕事に職員が熱心であることが、大学が学生にとって快適な場になるための必要条件である。そのような環境を達成するための施策が十分になされているかを、第2章、第3章、第7章、および第9章において振りかえった。

大学という大きな組織を隅々まで記述し尽くすことは難しいが、本報告書をまとめるにあ

たって、自分たちが過去数年間にやってきたことを客観的に見ることができたとは思いう。  
第 10 章にあるように、今後、この過程で気づいた長所を延ばし、欠点を一つずつ削除して  
いきたいと思う。